



会報 JAMT

JAPANESE ASSOCIATION OF MEDICAL TECHNOLOGISTS

発行所
一般社団法人 日本臨床衛生検査技師会
発行責任者 宮島喜文
編集責任者 深澤憲治

〒143-0016 東京都大田区大森北4丁目10番7号
TEL (03) 3768-4722 FAX (03) 3768-6722
ホームページ <https://www.jamt.or.jp>

P1 カンボジアの臨床検査支援に成果

P2~P3 14th Asia-Pacific Forum of Medical Laboratory Science参加レポート

P4~P5 医師から臨床検査技師へのタスク・シフト/シェア事例が、厚生労働省「いきサボ」に好事例として掲載されました

P6~P8各認定制度で「行列のできるスキルアップ研修会」を開催

P8 「生殖補助医療と認定について」講習会 オンデマンド編 受講開始!!



カンボジアの臨床検査支援に成果



2017（平成29）年から2019（令和元）年の3年間、JAMTは国立国際医療研究センターの医療技術等国際展開推進事業で「カンボジア王国における臨床検査の質の向上事業」をカンボジア臨床検査技師会（CAMT）、カンボジア国立公衆衛生研究所、カンボジア保健省などと連携し、臨床化学、血液、微生物検査を中心に検査法や精度管理などを実施してきました。（会報JAMT Vol. 24 No. 22, 23参照）

その後、世界的なCOVID-19により直接的な支援は断念しておりましたが、Zoomやメールでの学術支援を続けています。

この度、JAMT研修を受けたCAMTのメンバーが企画し、自らが講師となり“Quality Management in Hematology”セミナーを開催しました。3年間のJAMT-CAMT研修で習得した知識や技術により独自で開催できたことに対し、CAMTのVansith会長などからお礼と報告が届きました。

CAMT organized the training on 20 May, 2023. This is a first training after Covid-19.

The topic is Quality Management in Hematology. We focus on the MT that they never join the training and work in the Hematology section. 50 MT participated in this training. The trainers are from CAMT-JAMT training.

They start to understand the importance of IQC, EQA and calibration of CBC machine.

I will organize the next training in the next few months.
Ket Vansith

今後もJAMTは、学術支援・交流を通してカンボジアの臨床検査の技術や品質保証の向上に繋がる活動を継続して実施していきます。

（日臨技 副会長 長沢 光章）



14th Asia-Pacific Forum of Medical Laboratory Science参加レポート

日臨技 国際活動WG委員 片山 博徳

2023年4月22日（土）、14th Asia-Pacific Forum of Medical Laboratory Science (APFMLS2023) が台湾中山医科大学 (Chung Shan Medical University) で開催されました。この学会はTaiwan Association Of Medical Technologists (TAMT) の主催で行われました。今回の学会のテーマは「Global Trend on Artificial Intelligence and Regenerative Medicine」でした。台湾での開催が新型コロナウイルスの影響で延期され、4年ぶりの現地開催となりました。また、AAMLS (Asia Association of Medical Laboratory Scientists) の理事会も同時に開催されました。

JAMTをはじめ、海外からはKorean Association of Medical Technologists (KAMT) やフィリピン、マレーシア、香港、マカオからも代表者が参加しました。当会からは丸田秀夫副会長と、国際シンポジウムの講演者として佐藤正一先生、そして私の3名が参加しました。学会前日の4月21日（金）には歓迎夕食会が開催され、久しぶりの現地開催によって参加者同士の交流が深まる機会となりました。

4月22日（土）からの学会は、日本、韓国、台湾の3カ国による国際コミュニケーションセッションで始まりました。このセッションでは「The Application of Artificial Intelligence in Laboratory Medicine」をテーマに、佐藤正一先生が「The current state of Artificial Intelligence (AI) in clinical laboratories towards its practice」というタイトルで、AIに関する様々な実験から得られたデータやAIの特性について発表しました。佐藤先生の発表は実践的なデータを交えて行われ、参加者からも好評を博しました。ガラディナーの際には、多くの参加者が佐藤先生に質問をしていました。

昼食後には台-日代表者会議に出席しました。丸田副会長からは招聘へのお礼の挨拶が述べられ、JAMTのタスク・シフト/シェアに関する厚生労働大臣指定講習会の開催状況、品質保証施設認証制度、精度管理調査について報告がありました。また、2024年5月11日（土）から12日（日）に石川県で開催予定の第73回日

本医学検査学会や、2026年のInternational Federation of Biomedical Laboratory Scienceの学術大会の開催誘致への協力をお願いしました。TAMTのTe-Lung Tsai 理事長からはAPFMLS2023への歓迎の挨拶があり、台北市での2024年のAPFMLS開催予定や、台湾で2025年開催予定の第8回AAMLS総会について、JAMTへの協力要請もありました。

同日の14:00からのオープニングセレモニーでは、丸田副会長が宮島会長の祝辞を代読しました。ガラディナーには海外からの参加者やTAMTの参加者が集まり、文化の違いや専門分野の異なる研究者との対面による交流が行われました。これにより、新たな視点やアイデアを得ることができました。



オープニングセレモニーでの記念撮影

4月23日（日）の10:00からはAAML (Asia Association of Medical Laboratory Scientists) の理事会が開催されました。台湾、韓国、シンガポール（WEB参加）、フィリピン、マレーシア、香港、マカオ、日本が出席しました。各委員会からの報告があり、今年の10月にクアラルンプール（マレーシア）で開催される第7回AAMLS総会の概要がマレーシアの臨床技師協会から示され、ホームページへの最終調整が行われることが説明されました。



AAMLS理事会

以上が、第14回Asia-Pacific Forum of Medical Laboratory Scienceの学会参加報告となります。本学会を通じて、最新の医学研究トピックについての知識を深め、国際的な連携と交流を図る貴重な機会となりました。



台-日代表者会議
Te-Lung Tsai 理事長と丸田副会長



祝辞を述べる
丸田副会長

14th Asia-Pacific Forum of Medical Laboratory Science参加に参加して

佐藤 正一（順天堂大学 医療科学部 臨床工学科）



左から柯さん（TAMT）、丸田副会長、筆者、片山国際委員



発表の様子



講演記念の盾を受け取ったところ

14th Asia-Pacific Forum of Medical Laboratory Science (APFMLS 2023) が、2023年4月22日(土)から23日(日)に台湾の台中山医科大学で開催されました。日臨技からは丸田秀夫副会長、片山博徳国際委員、そして私の3名で参加しました。

学会会場の台中山医科大学は、新しく建て替えられたばかりで発表会場は設備も素晴らしく、非常にきれいなところでした。ポスター発表のブースは、畳一畳ほどもある電子ポスターが設置され、写真のように検索しながら閲覧する仕組みで



電子ポスター

でしたが、私は台湾語がわからないため、ただ眺めることしかできませんでした。このようなポスター発表は省スペースでできる反面、見る側に興味を引くタイトルの工夫が必要であると感じました。

今年のフォーラムのテーマは“Global Trend on Artificial Intelligence and Regenerative Medicine” 「人工知能と再生医療に関する世界的な潮流」であり、シンポジウムのテーマは「臨床検査医学における人工知能の応用」でした。人工知能(AI)は、病院における臨床検査技師の役割が増大する中で、病理検査におけるより正確な検出や意思決定支援に活用され始めており、今後多くの検査部門での業務改善や診療支援の可能性を秘めています。AIを実装するための技術と使用法に関する教育の必要性も高まっています。

私はシンポジウムの招待講演演者として「臨床検査のAIの現状から実践に向けて」と題して、これまでのAIに関する様々な実験からAIの特性について発表してきました。

具体的には、数値的なデータ処理においては、従来の統計学的な処理に比べ僅かに有意な面があることを報告しました。また、画像処理においては現在最も注目されている分野であり、高精度に判別する能力があり、臨床分野にも応用可能であることを示しました。しかし、問題点として血液像の分類例を出し、計算過程と最終結果は必ずしも安定していないことなどを取り上げました。

他に韓国の演者からは、「臨床検査医学における人工知能、現在の応用と将来」について講演され、台湾の演者からは現在研究過程の「固形がんの診断と予後のためのバイオマーカーの開発：オミクスデータ解析における機械学習」についての報告がありました。英語が苦手な私にとっては、30分間の講演は非常に厳しいものでしたが、貴重な経験となりました。推薦頂いた長沢光章副会長には御礼申し上げます。今回の経験を通じ、特に若い臨床検査技師の方は積極的に海外での発表経験を積んでいただきたいと思います。

最後に、今回、同行された旧同僚の片山国際委員には、出発から帰国まで大変お世話になりました。また、台湾に着いてからは柯建興さんに、台湾の街を案内していただくなど全工程に渡りお世話になりました。心から感謝申し上げます。

医師から臨床検査技師へのタスク・シフト/シェア事例が、厚生労働省「いきサポ」に好事例として掲載されました

いきいき働く医療機関サポートWeb（通称、「いきサポ」）は、厚生労働省が運営する外部サイトであり、医療機関の経営者・管理職の皆さまに対して、医療従事者が健康で安心して働くことができる職場環境づくりに取り組むにあたり、参考となるさまざまな情報を提供するウェブサイトとして、平成27年3月27日に開設されました。

このサイトでは、医療従事者、患者、経営にとってWIN-WIN-WINとなるような好循環を作るために、表記ウェブサイトを開設し、医療機関の勤務環境改善に関する法令や制度、調査研究、イベント等の各種情報、医療機関の勤務環境改善に関する取組事例などを紹介しています。

また、取組事例を投稿や、投稿された取組事例に対するコメントや勤務環境改善に向けた提案を投稿することもでき、勤務環境改善に関する情報や意見交換の場としても活用されています。

今般、この「いきサポ」に当会から推奨した3つのタスク・シフト/シェアに関する事例である藤田医科大学病院、済生会松阪総合病院、四日市羽津医療センターにおける臨床検査技師の取組みが、厚生労働省から好事例として掲載されました。

事例 1

藤田医科大学病院（愛知県豊明市）

開設	学校法人 藤田学園	機能	高度急性期
病床数	1,325床	標榜科	25科
職員数	2,772名（医師631名、看護師1,376名、他）		

取組前の状況

臨床検査技師による静脈路確保業務の開始

- 救急外来患者の多くは静脈路確保が必要であり、採血は、静脈路確保時に医師や看護師が行うことになっていたが、救急外来の繁忙時は人員不足のため、採血・点滴が遅れることが課題となっていた。
- 臨床検査技師が採血と同時に静脈路確保を行うことで、医師、看護師の負担を軽減、採血検体の質の担保、診療の迅速化と効率化が可能となるのではないかと考え、臨床検査技師による静脈路確保業務開始を目指した。

取組の内容

臨床検査技師による静脈路確保業務の開始

- 2020年、臨床検査部管理者、病院全体へと働きかけ、静脈路確保業務への打診を図った。
- 2021年4月より、静脈路確保業務開始に向けた具体的な取組として、マニュアル、手順動画、研修プログラムの作成等を開始した。
- 2021年7月より、日本臨床検査技師会主催の「臨床検査技師に対するタスクシフティング業務啓発事業」の研修を開始した。
- 2021年10月には、「良質かつ適切な医療を効率的に提供する体制の確保を推進するための医療法等の一部を改正する法律（令和3年法律第49号）」の成立により、臨床検査技師等に関する法律の一部が改正されたことを受け、タスク・シフトに向けた具体的な準備を行った。
- 2021年12月より、救急外来出向技師による静脈路確保

業務を開始した。

静脈路確保のマニュアルを作成

- 留置針穿刺等の手順書を作成した。

静脈路確保の手順動画を作成

- 留置針穿刺、採血、点滴、ルート固定までの手順動画を作成した。

研修プログラムの作成

- 臨床検査技師による静脈路確保業務に向け、研修プログラムを作成し、静脈留置針穿刺研修を実施した。

<研修のステップ>

1st Step	留置針穿刺の動画視聴、留置針穿刺の練習を行う
2nd Step	留置針穿刺の練習（トレーニングアームでの個人練習）を行う
3rd Step	日臨床講習会修了者による手技のチェックテストを実施
4th Step	医師による手技のチェックテストを実施

事例 2

社会福祉法人恩賜財団済生会 松阪総合病院（三重県松阪市）

開設	社会福祉法人 恩賜財団 済生会	機能	急性期
病床数	430床	標榜科	30科
職員数	698名（医師90名、看護師431名、他）		

取組前の状況

造影超音波検査における手順の統一の開始

- 医師は造影超音波検査の臨床的意義や検査方法、造影剤の使用目的や副作用について患者に説明する必要があり、説明後には検査の同意書をとる必要があった。
- 国内では臨床検査技師等による注射剤調製に関するガイドラインや指針等は整備されておらず、臨床検査技師等による超音波検査用造影剤の投与を開始するに当たり、造影剤調製についてのマニュアルを作成し、手順の統一を目指した。
- 超音波検査のために静脈路に造影剤注入装置を接続する行為、造影剤を投与するために当該造影剤注入装置

を操作する行為並びに当該造影剤の投与が終了した後
に抜針及び止血を行う行為を臨床検査技師等にタスク・シフトすることで医師の負担軽減を図った。

取組の内容

各種マニュアルの作成

- 測定方法、緊急を要する画像所見などを記載した測定標準作業書、造影剤投与後の注意事項、TO DOをまとめた造影剤投与後観察マニュアルを作成し、手順の統一を図った。
- 業務習得チェックシートを作成し、患者対応、検査、その他操作(物品の準備、備品・機器の点検等)、電子カルテなどの作業内容の確認ができるようにした。

造影超音波検査の同意書の確認

- 造影超音波検査実施時に、臨床検査技師等が検査前に投与患者の同意書を確認することで、検査に当たる同意書の受理手続きに係る医師の業務負担を軽減した。

造影剤の調製のタスク・シフト

- 臨床検査技師等による超音波検査用造影剤の投与を開始するに当たり、調製環境の整備、清潔操作、調製後の造影剤の衛生的管理等についてマニュアルを作成し、手順の統一を行うことで、臨床検査技師等への造影剤調整のタスク・シフトを行った。

静脈穿刺

- 臨床検査技師による静脈穿刺を実施する。
- 患者さんによっては非常に血管確保が困難の場合があるので、その場合は看護師の協力を得ることとする。

造影剤投与及び超音波検査の実施

- 臨床検査技師等が造影超音波検査のマニュアルとプロトコールに準じて検査を実施する。
- 検査後は適切な画像保存(静止画・動画)と検査依頼医師に対して的確なレポートを作成することで情報共有を行う。
- 造影超音波検査副作用確認用紙を設けて、造影剤投与回数、投与直後・検査中・検査終了時の患者の状態を記録する。

事例

3

独立行政法人地域医療機能推進機構 四日市羽津医療センター（三重県四日市市）

開設 独立行政法人 地域医療機能推進機構

病床数 226床

職員数 488名（医師50名、看護師226名、他）

機能 急性期

標榜科 21科

取組前の状況

患者数の増加による医師の負担増加

- 当院では大腸肛門病センターを併設しており、患者数及び診察時間が増加したことから、医師からの要望で2007年から臨床検査技師が肛門内圧検査介助を実施していた。
- 法改正により2021年から臨床検査技師が肛門内圧検査を実施できるようになり、診察時間の確保と医師の業務負担を減少させるために、臨床検査技師が実施することとした。

取組の内容

肛門内圧検査実施までのトレーニングの実施

- 臨床検査技師が肛門内圧検査を実施するにあたり、検査マニュアルを作成し、定期的に見直しをかけている。
- チェックリストを設け、担当前に検査手技及び検査に対する理解度のチェックを実施してから業務にあたるようにしている。
- 認定制度は特に設けていないが、検査の意義・検査の解釈、測定の方法、検査見学の経験、サポート付の検査実施経験等に係るチェックリストを満たしてから業務を行っている。
- 現在、タスク・シフト/シェアの講習会を終えた臨床検査技師4名(男性2名、女性2名)が携わっている。

肛門内圧検査介助開始から検査実施までの実績

- 診療時間確保及び医師の業務負担軽減に向け、臨床検査技師が検査準備、肛門静止圧・随意圧測定、直腸肛門反射測定、結果入力等の肛門内圧検査を実施するようになった。

時期	臨床検査技師による実績
2007年～	肛門内圧検査介助を開始した。
2021年11月～	医師の指導の下、臨床検査技師で肛門内圧検査を実施した。
2021年11月～ 2022年11月	1年間で91件（月平均7.6件）の肛門内圧検査を実施した。

※掲載した好事例の内容は『勤務環境改善に向けた好事例集 令和5年3月』（厚生労働省）より抜粋、編集しています。



「いきサポ」取組事例・提案投稿フォームについて

- フォームでは、医療機関の勤務環境改善に関する取組事例、医療機関の勤務環境改善に向けた提案を投稿できます。

(<https://iryuu-kinmukankyou.mhlw.go.jp/casestudy/form>)

※「いきサポ 取組事例・提案投稿フォーム」でインターネット検索

2024年4月より施行される医師の働き方改革について、時間的余裕はありません。

このため、各医療施設では医師から他職種への積極的なタスク・シフト/シェアが望まれており、この事例も推進の一助となればと考えております。

今後、当会のホームページに「いきサポ」の常設バナーを設け広報して参ります。

「いきサポ」には、各施設から事例を投稿する機能もあり、各ご施設の臨床検査技師の皆さまにも小さな取り組みでも結構ですので、積極的な投稿をお考えいただければ幸いです。

投稿にあたり不明な点がありましたら、下記連絡先にお問合せください。

日本臨床検査衛生技師会 事務局政策調査課
Mail seisaku-syougai@jamt.or.jp

各認定制度で「行列のできるスキルアップ研修会」を開催

群馬県高崎市で開催した第72回日本医学検査学会に先立って令和5年5月19日に各認定制度のスキルアップ研修会が開催されました。全国学会に併設のスキルアップ研修会は毎年恒例となっていました。近年は新型コロナウイルス感染拡大の影響によりWebでの開催となった研修会もありました。本年はすべてのスキルアップ研修会を現地開催で行うことができました。

今回と次回の2回にわたって受講者の皆様からの感想をご紹介します。

認定一般検査技師制度

行列のできるスキルアップ研修会 Part XII

スキルアップしよう！知って得する一般検査の肝！

～腎臓と障害について学ぶ～

宮前 香織

今年のスキルアップ研修会は「腎臓と障害について学ぶ」というテーマで、久々の現地開催に参加しました。講義内容は「正常な腎臓組織を理解する」「尿生化学検査、検体の取り扱いとデータの見方を理解する」「腎障害について理解する」「尿沈渣から考える腎障害～薬剤性結晶の出現意義」「症例データから考える腎障害」となっており、解剖学などの基礎編から始まり、検査データから疾患を推定するなど、腎臓疾患を理解するうえで必要な知識を習得することができました。特に尿生化学検体の前処理で測定結果に影響が出る成分や、薬剤性結晶や不明結晶を認めた時には必ず溶解試験を行ったうえで報告することの重要性を再認識することができ、検査データから疾患を推測するためには総合的な臨床知識を持つことの必要性を強く感じました。

昨年まではWeb研修会で画面越しに聴講していましたが、現地で講師の先生方などに久々にお会いすることができ、良い経験となりました。また現地での研修会に参加したいです。

矢作 勝江

今年の行列のできるスキルアップ研修会は「腎臓」をテーマに、講演1で正常な腎臓の病理組織の確認から入り、講演2では尿の生化学データの見方や臨床的意義についての理解に重点がおかれていました。講演3では先の2つの講演を基に腎障害についての進展機序(final common pathway)を病理組織学的に、また生活習慣病との関連や蛋白尿、慢性低酸素障害、薬剤性などによる腎障害について詳細な説明があり、続く講演4で薬剤性腎障害についての機序と尿沈渣中に薬剤性結晶の出現した症例の再確認がありました。知らないものは認識できないため、私たちの知識向上や臨床

側への報告意義の重要性を再認識しました。最後に症例から腎障害における血液や尿データの異常を読み取り考える内容でした。全ての講演に繋がりがあり、腎臓そして腎障害について知識を深め再確認できる研修会でした。

現地開催の講習会参加は久しぶりで、大きなスクリーンを前に会場の椅子で5時間は中々ハードでしたが、直接講師の先生方や参加者と接することができ、多くの情報と刺激を受ける機会になりました。講師の先生方、運営の皆様ありがとうございました。



認定病理検査技師制度

行列のできるスキルアップ研修会 Part XII

認定病理検査技師に必要な

ヒューマンエラーメカニズム分析・問題解決手法



鈴木 慎也

本セミナーは、前半はヒューマンエラーとは何か？から行動理解のための3つのモデルを学んだ。そして、医療事故調査に用いられる手法の1つでImSAFER(アイエムセイファー)とよばれるヒューマンエラーが関係した事象分析手法を学んだ。

後半は、グループに分かれ、想定した医療事象事例をImSAFERを基に、分析→改善→実施→評価の手順を実践形式でロールプレイングし発表を行った。

ヒューマンエラーは、「人は自分の理解した世界(心理的空間)に基づいて行動を決定」しており、その行動が「期待された行動から逸脱」した場合に生じ

る。その結果から逆算していき対策立案、評価していくことを学んだ。

今回の講義は実は実践編であり、本来であれば基礎コースが前段階として存在するとのことで、自分を含め多くの参加者は頭を悩ませながら実技講習を行った。だが、講師の先生も「大枠を捉えられイメージできるようになっただけでも幸運であった」とおっしゃっていたが、私自身もそう感じることができ、また人間の行動心理を学ぶ講義にはあまり出会わないので有意義な講義であったと感じた。

安藤 加奈江

今回講習に参加して学んだことは、最初にエラー発生メカニズムとしてコフカの「旅人の行動には情報不足が招く危険性がある」を示され、人間は自己の心理的空間で判断するという話や河野先生の「利益」と「損失」を天秤にかけて自らは正しいと思って誤った行動をするという判断モデル。この2つの話で当事者の心理状態を理解することができました。

グループワークでは「時系列事象関連図」や「P-E情報整理表」作成で時間がかかり大変でしたが、実際にやることで要因解析への理解が深まりました。さらに相手の作業を中断させての「ダブルチェック」にはリスクがあること、「指差し確認」の方が効果的では。との指摘や現状の作業は本来のチェック効果があるのか？を見直しつつ、効果のない作業は止める選択もあるという考え方。医療関係者はなぜ指差し確認をしないのか等。河野先生の厳しい目線での講義は気づかされる点が多くありました。当事者だけの掘り下げだけでは終わらず、さらに携わったほかの人間の行動も深堀りしていくことも必要である点等。まだまだ、手ぬるい医療安全対応だったと気づきました。今後はここで学んだ点を意識して一段上の業務改善に取り組みます。河野先生、本当にありがとうございました。

認定臨床化学・ 免疫化学精度保証管理検査技師制度 行列のできるスキルアップ研修会 Part XII

精度保証に求められるスキルとは



杉村 楓

今回、行列のできるスキルアップ研修会に参加し、4つの講演を拝聴しました。

『新しい日臨技施設認証制度による品質保証』では、品質を維持するために他の部門と一緒に取り組んでいくことの重要性が学ぶことができ、当院も新制度を通じてよりよい検査室にしていきたいと思いました。

『精度管理って何？事例から活用の仕方を考えよう』では、内部精度管理や外部精度管理について講演いただきました。内部精度管理で管理幅を超えてしまった場合の対応には悩むことが多いですが、事例を交えつつお話していただき理解が深まりました。

『検査室の管理運営』では、精度管理は突き詰めればどこまでもできますが、一方、コストもかかってしまいます。私は、良いデータを出そうとばかり考えてしまいましたが、管理者・経営者の目線では精度管理はどのように見ているのかを知ることができました。

『検査値から考える～品質保証の観点から～』では、RCPC形式でデータ異常の見つけ方を学ぶことができました。通常は考えられる疾患を探しますが、今回は機器異常や検体異常、生理的変動などを考えるというのがいつもと違う面白さがあり楽しみながら学ぶことができました。

今回の研修を受け、明日からの日常業務に役立てていきたいと思います。

稲村 奈津美

私は、普段生化学免疫検査に携わっており、日々の精度管理に悩んでいること、また認定資格を取得したこともあり参加しました。

末吉先生の「新しい日臨技施設認定制度による品質保証」では、日臨技の施設認定制度が2022年6月1日から『品質保証施設認証制度』の新制度となり、旧制度との相違点について学ぶことができました。「事例から活用を考える精度管理」では、内部精度管理の手法と各特徴について再確認することができました。これから日臨技をはじめ多くの外部精度管理調査が始まりますが、評価結果もうまく活用することの重要性を実感しました。神山先生の「検査室の管理運営」では、日常生活を例に挙げながら検査室の収支管理を理解する内容で面白くわかりやすかったです。「検査値から考える品質保証」では、RCPC式で日常でも起こりうる事例ばかりでした。

多くの先生方の講義を受けることができ貴重な時間となりました。今回の研修会を今後の業務に活かして、当検査室の精度管理への取り組みについて考え、より信頼される検査室として行きたいと思います。

医療技術部門管理資格認定制度 行列のできるスキルアップ研修会 Part XII

VUCA時代の臨床検査と臨床検査技師を考える

～SF思考と2045年医療の未来～



田中 克昌

今回のスキルアップ研修会では「VUCA時代の臨床検査と臨床検査技師を考える」というテーマでワークショップを行いました。VUCAとは変動性 (Volatility)、不確実性 (Uncertainty)、複雑性 (Complexity)、曖昧性 (Ambiguity) の頭文字をとった言葉で、未来の予測が難しくなる状況を表す言葉です。まずはこのVUCAという言葉を知って必要と思うスキルを各自考え、グループディスカッションを行いました。その後、「SF思考」という思考法を用いて、「未来の言葉」を作成し「未来のガジェット」をグループワークで考えました。想像や仮定の話を討議するというとても難しいワークでしたが、皆さんの考えに触れとても刺激的なワークとなりました。未知のことを想像するこの思考法は、目標や戦略を作るうえ

でも役に立つと思いますし、また側面を変えて考えれば、危機管理にも繋がるものと思います。とてもハードな研修でしたがVUCA時代の臨床検査技師にはこのような思考法も必要なスキルであると感じました。

古井 郁恵

今回参加した「医療技術部門管理資格認定制度 行列のできるスキルアップ研修会」では、社会構造の変化とSF思考について学びました。

講演部分では、VUCAという時代の変化とSF思考がビジョンメイキングや新しい社会をシミュレーションするのに利用できるというお話がありました。その後のSF思考を用いたワークショップでは、初めに「最近気になっていること」と「医療に関して気になっていること」を個々に付箋に記入し、そこにある言葉を掛け合わせました。そうしてできた造語の中から、私たちのチームは「筋肉ふ卵器」を選び、そんな未来の製品が使われる世界を想像しました。

コロナ禍のように、世界でリスクを共有する社会変化は今後も増えてきます。SFは、そこに存在する価値やリスクを常に考えてきた分野だから、SF思考は今に通用する思考法の一つなのと感じました。

先の見えにくい社会だからこそ、私たちには柔軟な思考や協調性が求められます。想像力を働かせ、価値観を常にアップデートすることが危機管理能力を高める。そう感じた6時間の研修会は、あっという間に過ぎていきました。

求められる臨床検査技師から、求める臨床検査技師へ。発想を転換するために、仕事でも生活でもSF思考という視点を持って活動していきたいと思います。

「生殖補助医療と認定について」講習会 オンデマンド編 受講開始!!

テーマ：新規保険収載された生殖補助医療 ～～ 業務と認定 ～～

会 期：令和5年6月1日(木)～8月31日(木)

申込締切：令和5年8月20日(日)

参加申込受付中です。Web開催のため募集人数制限はございませんので、奮ってご参加ください。
研修内容の確認、お申込みは当会ホームページをご確認ください。

https://www.jamt.or.jp/news/2023/news_004831.html

（編集後記）梅雨入りの中でも晴天の週末、田代たけのこ祭りに足を運んで今が旬の根曲がりだけ素焼き、たけのこ汁などを堪能しました。山菜採りには熊が怖くて行けない食するだけの凡人ですが、シドケ、ボンナ、アイコ、ミズ、ワラビなど山菜料理の美味しい5月6月は格別な時期でもあります。

今号は国際色豊かにカンボジア、台湾での交流が報告されております。又、「いきサポ」でのタスクシフトの好事例報告もあり、今後も会員皆様が国内外でいきいきと働いている姿を披露していただければと思います。
(清水)